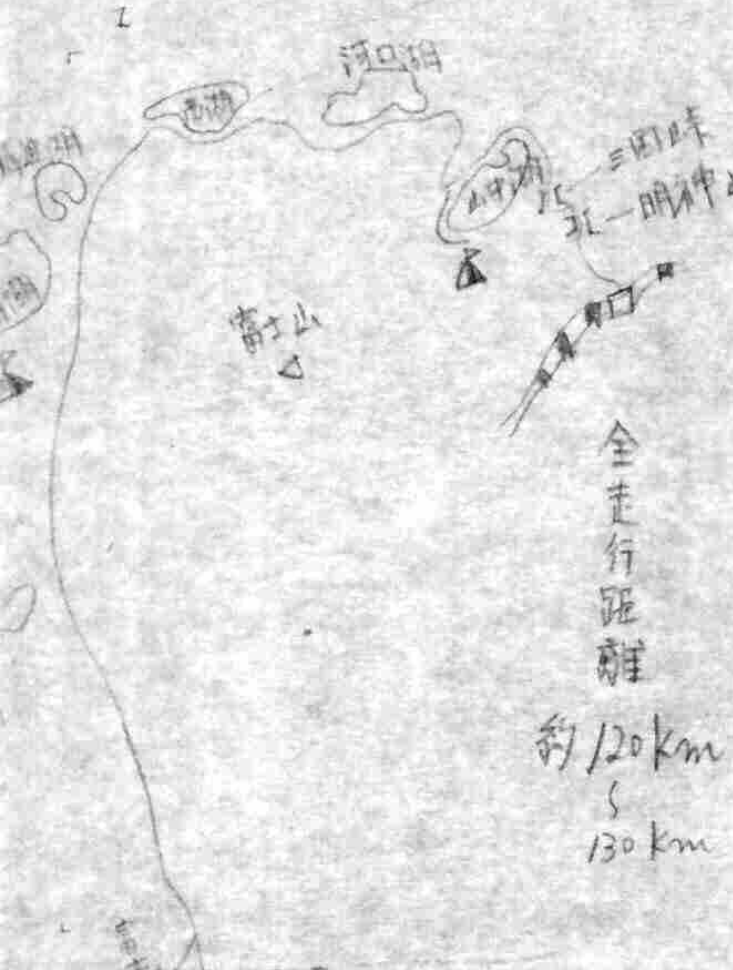
7A-1

初めての体験

1 昭和五十年度 準備合宿 1 名取

期日 7月17日～19日

参加者 堀(三年) 中村(三年) 野崎(三年) 松重(三年)
毛利(三年) 溝口(三年) 富田(二年) 金谷(二年)
沢木(二年) 宝谷(二年) 鈴木(二年)
栗原(二年) 名取(二年)



全走行距離
約120km～130km

一年生にとっては、初めての輪行キャンピング。十七日の朝六時五十分東京駅集合。僕は少々二日酔い。沢木君と西小山の駅で待合わせていたのだが、朝起きれず遅刻。幸にも東京駅に着いたのは集合時間前。前日やっとの事で、輪行袋に納めた自転車も行儀よくホームの片隅におちついている。ふと横の富田君の輪行袋を見るとこれはひどい。彼言わく「朝、目黒の駅前で分解したので、十分時間がなかったのだ。」「そろそろ、みんな集まる、だが！」と部長の源さん。そうはもっこいい、金谷君がいないのである。電車はホームに入り、ヨもなく出発だというのに。結局金谷君は、おいて行こうとみんな電車に乗り、ヨもなく電車はホームを離れたのだが、金谷君はしぶとい、なんと言うしぶとさだ。電車に乗っているではない」

る」か。金谷君言わく「電車発車寸前に乗ったため、
たの」電車は僕たちを乗せ、目的地に向かい
走っている。途中田子津で東海道線から御殿
場線に乗り換えて駿河小山で下車した。駅前
でみんなそろって自転車を組み立てた。ここ
で思わぬハプニング。なんと僕はチャリ丁の
とわねじをねじりわすれてしまったのだ。と
なりたいた塚部長さんが、心配そうに見てく
れたが、わしのかれ端は、わしの穴に入って
しまって外に出てくれない。そこへ世紀の使
者冨田君が現れ、器用にも、ねじの残骸を、
わし穴から取ってくれたのである。しかも、
冨田君愛用のダルマを借してくれ、やっとう
事で僕は自転車を組立てる事が出来た。（ち
「う時のダルマは、まだだいじに僕が保管して」

「いるので冨田君心配なく。」

さっそうと十三台の自転車は列をなして走り初
めた。途中トライアインで昼食を取り、河口湖に
向かってまた走り出した。後から考えると、この
ころは幸せであった。後に恐怖の明神、三国峠
がひかえているとは知らず・・・・・。道中富士山
周辺で記念撮映をしてまた走り出す。"さあー
これから峠に出戦。"などと言う気持ちは全然なく
第一これから峠をとるのだなとは全然知らなか
ったのだ。最初はアスファルトのとりでしたが、
そのアスファルトが終わるとカタカタ道。一生懸
命ペダルをふむのですが、なかなか前に進みヨせ
ん。太ももが割れるように痛くなってしまいました
自転車から降りてしまいました。根性がなかった
「なあー」あのカーブを曲がればきっと峠はあ」

「まいったなあ」と確信して、再度自転車に乗りました。

「やにこの悪路を呪うような口調で、愚痴をこぼしていたが、しばらく休むと四人はまた自転車に乗りました。

7A-2

したが、二三回クランクを回しただけで、また推却。やっとの事でカーブ地点にたどりついてが、くり。またまた峠は続いているでは、なかなか前に進みません。上り道に加え、路面状態が悪く、力を入れても、スリップしてしまうのです。それでも四人は、執念深く、僕からみると、ペダルをこぐのです。僕は、相変らず自転車を押しています。しばらく行ったカーブ地点で大休止をする事になりやっと安心。みな無事にその地点に到着し、口々に道路の悪口を言う。悪口を言う事で疲れをいやしているかのようだった。それと同時に、あと少しでこの峠も終るだろうと確信し、渓望し、体を休めていたのです。

ありませんか。僕の横を走っている溝口さんの表情は、なんとも言いがたく、非常にたいへんなようだったので、僕は自転車からおりて、自転車をおす事に決めました。溝口さんは、二、三度こぎ地に足をつけ、また二、三度こぎ足をつきそしまう動作を繰り返していたのであります。そんな溝口さんを横に見ながら、第の悪路を感じつつ、自転車を押しました。しばらくして直線のようが前方に伸び先を走る四人（頂さん、野崎さん、毛利さん、沢木君）が視界の中に入ってきました。

ところが実際は、ここまでの距離は峠のほんの一部にすぎなかったのです。そんな事とは、つゆ知

「さて、再度自転車にまたがり出発。最初のピッチ位

4

「は　自転車に乗っていたのですか　またも？」

自転車を押す事に決定。いけども、いけども峠終らず。あのガーブを曲がればきっと峠も終るだろうとそればかり考えながら、前を走る野崎さんに（不思議ッ！この時僕は二番目を走っていや押っているのです。）「まだ峠につきませんか。」と一種のかけ声をかけつつ自転車を押してゆきました。上着は、汗でつけものみたいにぐっしょりと塩からくなって、非常に重くこれはそれはつらいばかりの時でした。何度目かの僕のかけ声に対する野崎さんの返事は、並々ならぬ響もって僕の耳に入ってきました。

"峠についたぞ！"

「僕は動かぬ足を叱咤して自転車を追った。

「"ついた！"と思いしや何んとそこは明神峠でありこれから三国峠を目差さねばならぬと言う。

"がっくり！"

明神峠で大休止。ここで異様と思われる物を目にした。バスの停留所である。バスが休日に限り一本通るのだそうだ、この道を？　このバス時刻表の前で記念撮映。三国峠目差して出発。というも僕は相変らず自転車を押すのである。いくらあせっても峠の頂上にはつかず、足の方は惰性で動いているまう有物である、前を走る野崎さんの姿も見えず、後に来るはずの仲間も見えず、孤独な自転車押しはただ一人。つらさを忘れるために前方を見るのをやめ、ただ足もとの地面を見て押す事にした。やっとの事で峠の頂上についた。野崎さんと"つらかったなあ！"と思わず言いました。」

ぶりの来るのを待っていた。野崎さんは、頂上」

3

4 ―3 前のめり値を押しただけで（すごいサル道

5 で自転車で来る事は不可能と思われる）あと

全部自転車に乗ってこうにきった。自転車を

引摺る物であるのに、いとも。ふとみんな到

着！とにかくのんびりからから、疲労困ぱい

の状態で、食み物の自動販売機のある所まで

走ろうと、前とは打って変ってなだらかな下り坂を快

適に乗って走った。この日は河口湖まで行く

予定であったが、時間的にも、疲労度がこい

ので無理であり山中湖でキャンプする事に

決定。キャンプ場につき、さっそく食事の用

意に取りかかった。ここでまた僕にハプニン

グ。生死を決する食器を忘れて来てしまった

5 「ウ、ウ、幸いにも、浜木君に食器を借してもら」

「い、名コックは村さんの作った肉入り野菜いため」

を食べ、静かな眠りについたと思われたのだが、

僕の横に寝た浜木君の歯ぎしりと寝相の悪さに、

じゃまされ僕だけはなかなかねつけなかった。（二日

目の夜も浜木君にはまいるのだが。なにしろ僕の

腹をまくらにして寝るのだから）

二日目は、山中湖から本栖湖まで走った。朝

さっそくキャンプ場をあとに忍野八海に向かった

。昨日とは、打って変ってのどかな道、空はすみ

すみまで晴れ渡りなんとも気持ちのよい日であ

った。八海に着いて、地から湧きでる冷水で顔を

洗い、八海をながめた。横を通ぎる青々とした稲

が、夏の光の中でまぶしく見え、走っている僕の

心も洗い清められてゆくような、

「日でおわった。河口湖に向う途中 全員でもれなく」

6

「いいとこうとカリエケへ緑（銀）のほ息地に」

立てより、管理人のおばさんの名口調の説明に耳を傾け、また走り出した。交通量の激しい国道は危いと言う堀部長の提案により地道を走る事になったのだが、これが裏目に出て僕の後輪がみごとパンク。野崎さん、毛利さんの指導をあおぎ、初めてのパンク修理、パンク修理も終わり河口湖に向かって走り出す。河口湖で高い昼食を取り、湖畔で休憩。僕は、ニミが細れて居る。観光用の馬の研究。「ね、また出ーたぞ、ここまりたさいの」

「大つも？」

十三名のライダーは、さっきうと自転車にまたがり出発。この時、まちがいが起きた。

「富田君を先頭にした事だ。後を走る毛利さん」

「野崎さん、宝谷君と、「おい、先頭はどこまで」ていろんだっいくら走ってもおいつかないー」

と語り合いながら、つっ走る。富田君の速い事、平たん、もしくは下り坂にかけての富田君の速さにはついる。（上り坂以外は富田君を先頭にする）

西湖に沿う地道を走る十三台の自転車。途中こうもり穴に立ちよる事にしたが、中学の団体が僕らより先に入ってしまい見学するのをあきらめまた走り出したのだが、ここでまた僕にハプニング。自分の自転車のみぎの番号を忘れてしまったのだ。やっと思い出した時には、もう誰もいない。さて、どっちの道を行ったのだろうか、やっとの事で仲間を見つけた時には、仲間はすかすかし「顔をして一休みは、こっちの気持ちも知らないで」

「で、いよいよ。さあ、出発という時になってまた
たまたまかこんな。金谷君が突然「河口湖へ
帰る。」と言い出したのだ。金谷君は、日ん
とうにおかしなやつだ。河口湖で言えばいい
のにこんな所で。自転車は精進湖を横に見な
がら、今夜のキャンプ地本栖湖へと向った。
キャンプ場に到着するとさっそく食事の用意
今晩の料理はカレーライス。肉が少々でタマ
ネギばかりのカレーライスであったが、腹が
減っていたせいかうまかった。特にもりさん
が指をつっこんで味見したあのカレーはうま
かった。食事も終り、湖畔で酒を飲みながら
花火大会をしたいや花火見物をした。隣の
グループがうちあげる花火をみんなで見
物。湖畔からキャンプ場へ帰ってきてからの」

「一こま。
誰かまわく「名取がみんな前で小便してるぞ。」
名取代言わく「小便もしたくないいい男！」
堀部長言わく「かえるに小便をひっかけられた
ような顔をして。」
みんなテントに入り隣にキャンプしているバカ
騒ぎの好きなグループの春歌をこもり歌に深い眠
につく。
つぎとつ出たホイのこさホイのホイ・・・。
最初日は表富士周遊道路を走る予定であったが
中止。これもみんな初日の時のせいである。場を
みると体が拒絶反応を起こすのだから。結局一番
軟弱な下りのみと言ってさいい国道139号線を富士ま
で走る事にした。（あー、恥かしい。）
「みんなは気くーした顔で走っている。下りに感

「富田君、富田君に負けずと中村さん、中村」さんと言う人はおもしろい人で休憩になるとみんなビールを飲むのである。中村さんはカンビール無しでは走れないのかな。鈴木君も栗原君も元気はつらつ。途中田貫湖により、下りっぱなしの道を走り続けた。（田貫湖に着く前に宝谷君は、ある事をしたのだが、それはヒミツ。）

白糸の滝の所で富田君は私用により富士宮に直行。残りの者は白糸の滝を見物した。一行は白糸の滝を後にして、名も知らぬ風穴見物へと急いだのだが、目あての風穴がどこにあるのか全然わからず、最後には、まるもう案内で風穴にたどり着いたのだが、期待はずれの物とわかり、さっさく風穴から脱出、近

「だ松重さんおけは、「探検しようよ」と言い乱暴に立って左の奥深く入ろうとした。きっと松重さんは穴の探検が好きなんだろう。

あとはもう富士見ヶ丘まるだけ。心は全員富士の駅に着き、東京行きの電車に乗った。電車の中で一人だけしかめっつらをしている人がいた。その人は、合宿中ずっとこんなで走ったため、肩が日に焼け非常にヒリヒリしているらしく、輪行袋もかつげずくしゃいそうだった。その人は わかりこんぐ部部長、堀忠一さんでありました。それにしては 僕も合宿中ずっとこんなで走っていたのに、たいしていたくないのは どうしてだろうか。やっぱ育ちのせいかな。